



# 三島企業の考える 三島カルチャー

# 6

## 会社の魅力を高める 継続的な社会貢献

1911年に三島で創業し、以来一貫して共存同業を理念として堅実な経営を続けている三島信用金庫は、静岡県東部・伊豆一円に50の支店を持ち、地域経済を支えている。2011年には創立100周年事業として、昭和初期に建てられた本店の建築意匠を踏襲して新築建替し、最上階にギャラリーを新設して話題になった。三嶋手の茶碗で手ずからお茶を入れてくださった稲田理事長に話を伺った。

—— 理事長自らお茶を淹れていただけとは思いませんでした。

ここには全国からお客様が来られるので、三嶋手茶碗で私がお茶を淹れさせていたいです。三嶋暦の流麗な字に似ているから、この茶碗を「三嶋手」と呼ぶようになったというPRをしています。水の話や三嶋手茶碗の謂れを話して、三島の文化を少しでも知ってもらえたらという思いからです。

### 地元の文化や歴史を業務に活かす

三嶋は「古今伝授の街」でもあります。郡上八幡から飯尾宗祇が伊豆に来たということで、郡上の八幡信用金庫ともお付き合い

いがあります。「三島宗祇法師の会」の皆さんをお誘いして、一泊旅行に行きましたよ。郡上八幡には水神さんがあり、「宗祇水」と言っています。郡上は、古今伝授をはじめとした歴史や文化を発掘してまちづくりにも活かしているんですね。

でも、この三島や伊豆は歴史や文化があまりなくて、活かされていないように感じます。例えば足利尊氏の息子の二代将軍足利義詮のお墓が、宝鏡院（川原ヶ谷）というお寺にあるんです。このことは、地元の人にもあまり知られていませんね。

—— さんしんギャラリー善ほどのような思いで作られたのでしょうか。

伊豆半島にはとてもたくさんの方の芸術家があります。金庫の100周年記念事業として、本業で創作活動をしている、プロの作家の作品を鑑賞できる場所を作りたいと考えました。

ギャラリーの運営は佐野美術館にお任せしていますが、美術館に委員会を設置して、そこで選ばれた方が個展を開催することで、グレードの維持を図っています。

私どもの営業エリアである伊豆・東部で創作活動をされている方か、ご縁がある作家さんを紹介しています。

—— 三島についてお聞かせください。

2027年にリニアモーターカーが開通し、新幹線が「ひかり」と「こだま」だけになると、三島と東京が今以上に近くなると思います。今でも東京への通勤・通学者が多いですが、さらに多くなるでしょう。そうなるので、「東京にはない三島」をこれから作り上げていかなければなりません。「三島らしさ」とは、森や水、そして空気だとか光だとかです。新幹線が停まる駅で、湧き水が駅前には湧いているところは他にありません。この水をどう大切にすることが我々の役割ではないでしょうか。東京近郊の街というのは、みな造形的です。しかし、三島は自然美です。自然な美しさをここで味わってもらおうということで、三島にしかないものが生まれるのではないかと思います。そういったことに取り組めたいですね。



プロフィール

三島市出身。日本大学法学部卒業後、1968年三島信用金庫へ入庫。以来、静浦支店長、原町支店長、沼津支店長等を経て、2000年に常勤理事就任。その後、常務理事を経て、2007年理事長に就任。2013年より三島商工会議所会頭を兼務。趣味はボランティア活動、ケーキ作り。

## 理事長 稲田 精治 氏



### 本物の芸術作品で 三島の文化力を高める

1ヶ月間1人の作家の作品を展示して、全国からお客さんが見に来られます。芸術家というのは、すごく人脈が広いんですね。我々の付き合いの仕方とは違うので、それは私にとってもありがたいなと思います。最終的には、三島の文化力を高めることができるのではないかと思います。

新しい本店は、75年前の意匠に、現代的なガラスを使ったデザインを加えているので、大変趣のある建物になったのではないかなと思います。本店の前は、三島の散策ルートになっています。源兵衛川を歩き、三嶋大社を訪れるときに寄ってもらいたいので、ギャラリーの休みを金庫が休みの土日ではなく木曜日に行っています。守衛を置かないといけないし、費用がかかりますが、重要な作品を展示していることで、維持管理は徹底しなければいけません。面積も普通の画廊よりも広く、照明も最新のLEDで、作家さんには喜んでいただいています。

また、下田、熱海、長泉にある支店にストリートギャラリーという展示スペースを設けています。金融機関ですから、土日は休みですが、そういうときにも地域に自然に溶け込んでいけるようにしたいなど考えています。熱海支店前には人が多く、観光客の方々にも喜ばれています。



さんしんギャラリー善

### 社会貢献事業が 安定経営につながる

新しい建物を建てるときは、最初からギャラリーを作ろうと計画しました。経営者がそれを「無駄」と考えるのか「価値」として考えるかで、大きく違います。一度始めると経営が悪化してもやらなければなりません。我々にとってギャラリーを開設することは、経営を安定化させなければならぬという使命になります。

当金庫には、知的障がい・精神障がい・発達障がいの方が働く特例子会社「さんしんハートフル株式会社」がありますが、こちらもギャラリーと同様、経営が悪いからと言ってやめることはできません。

我々としては覚悟が必要ですが、継続して社会貢献に取り組んでいるという姿勢を示すことが、三島信用金庫のブランドイメージになると考えています。

### 「三島の文化」を 自然な美しさを活かす

その原点は、恵まれない人を金融という部分で応援しようというものです。地域を良くしたいという理念は、今の地方創生と全く同じです。それが現在まで金庫の精神として流れています。

「さんしんギャラリー善」は、この大村善平の「善」をとって名付けました。

自然な美しさを活かす

「三島の文化」を



### 三島信用金庫

静岡県三島市芝本町12番3号  
(本店営業部)

<https://www.mishima-shinkin.co.jp/>

三島企業の考える三島カルチャーは、三島の文化応援プロジェクトが、三島周辺に拠点を置く企業の方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等。詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。

次回「伊豆箱根バス 代表取締役社長 杉山 武司 氏」